

# 台北に派遣されたもうひとつの使命

前台北日本人学校 教諭

兵庫県伊丹市立天神川小学校 教諭 徳田 達郎

キーワード：使命，日本語世代，日本統治時代，異世代交流，日本人らしさ

## 1. 赴任地（台北）の概要

台湾の中心都市、台北市は人口約260万人の近代都市である。台北日本人学校は、その中心部から約12 km北に位置する天母（ティエンム）という街にある。天母はもともとのどかな田園地帯であったが、日本人学校やアメリカンスクールが設置されると、そこに子どもを通わせる外国人が多く住み着くようになり発展した。今では、中国語、英語、日本語が飛び交う国際色豊かな街になっている。

平成23年度は小学部17学級、中学部6学級、児童生徒は700名を超える。

職員は派遣教員、現地採用教員、用務員、警備など含めて65名で、日本人学校の中では大規模校である。

## 2. 自分の使命は何？日本統治時代を経験された方の話を直接聞き、語り継いでいきたい

戦後66年が経過し、日本統治時代を経験された方がご高齢でどんどん亡くなられている。

直接お話を聞き、「生きた歴史を語り継いでいく」ことは、台湾に派遣された者の使命だと考えた。そう意識するだけで、ご縁に恵まれた。日本語世代の方が集まれる「玉蘭荘」、現地採用の先生のおじいさん、私のマンションの上の方、小さな出会いをきっかけに次々と話を伺うことができた。



日本語世代の方と玉蘭荘にて

## 3. 玉蘭荘で日本の歌を大合唱される理由

日本統治時代に学齢期を過ごした方が集われている「玉蘭荘」で、歌の講座をする機会を頂いた。驚いたのは「歌って下さいね」と頼みもせぬのに、1曲目の赤とんぼから大きな声で一緒に歌われたこと。「どうしてですか？」と尋ねると、日本の曲ばかりの愛唱歌集を見せて下さった。玉蘭荘に集われる度に日本語の曲を歌っておられるのだ。

また、お話しを伺って驚いたことは、小学校の思い出をはっきりと覚えておられたこと。遠足の思い出、先生に叱られた思い出…。「ホントに厳しかったよ。でも愛情があった」と、先生の事を「恩師」と言いながら心から慕っておられた。先生を何度か台湾に招いたり、日本で再会したことなど、エピソードをいくつも聞かせてくださった。

## 4. 玉蘭荘での言語ケアとは？

1時間半ほどの講座が終わった後、玉蘭荘の担当を長い間されている今井さんが、玉蘭荘のことを詳しく話してくださいました。まず「高齢者デイケアセンター」の意味。何をケアするか、というと「言語のケア」と言われた。つ

まり、小学校や中学校の時、日本語の授業を受けていた人たちは、学校で台湾語を使うことは禁止されていたため、「勉強＝日本語」だった。本を読むのも日本語であり、自分の思いを友だちに伝えるのも日本語だった。しかし終戦後、日本語が禁止され、共通語は中国語（北京語）になった。この言語の断絶は、深い心の傷になっていて、今でも心から感動できるのは、中国語ではなく、日本語の物語。また、中国語も、日本語も、8割しかできる自信がなく、自分の思いを中国語で書いても、正しく書けているかどうか、不安でたまらない。一貫した言語で義務教育をする重要性を強く語っておられた。また、戒厳令の中、地下室に隠れるようにして日本の紅白歌合戦のビデオを見たとき、涙が出てたまらなかった、という話にも胸が締め付けられる思いがした。

日本統治時代に、教育制度を確立し、インフラの整備を行った日本統治時代があるからこそ今の台湾がある、というのは一面として事実ではあるけれど、上記のように、その犠牲になっている人を思うと、日本統治時代を肯定できない。そして、玉蘭荘に集うご年配の方は、日本統治時代の美談を語られるけれど、それは自分を守るためではないか。本当に親しくなると、本当に苦労したことを吐露されるんだから、ともおっしゃった。最後に、この赴任の間に、表面的な歴史ではなく「生きた歴史」を勉強することを強く勧められた。胸を強く打たれたような気がした。台湾に赴任している使命がここにあるように強く感じた。「日本統治時代を経験された方に少しでも深くお話しを伺いたい」と。

## 5. 日本統治時代の教育って？

幼い我が子と一緒にバスや電車に乗ると、必ずといって良いほど、席を譲ってくださる。どうしてなんですかと尋ねてみた。20代の方は「自分も幼い頃に席を譲ってもらっていたから当たり前になっている」と言われた。80代の方は「日本教育があったからですよ」とおっしゃった。

また、野口謙さんに伺った話だが、元総統の李登輝さんに「どうしたら日本の教育は良くなりますか」と尋ねたところ、「そんなのは簡単だ。戦前の教育をすればいい」とおっしゃったそうだ。日本では「戦前の教育＝軍国教育」としてすべて否定されている感じがするのに、台湾ではいったいどのような日本教育が行われていたのだろうか。

志願兵としてインパール作戦に参加した経験のある簞錦文さんは、「私は今でも心の中では日本人だと思っています」とおっしゃり、「教育勅語」を暗唱してみせてくださった。「これのどこが軍事教育なのか」と腹立たしい表情でおっしゃった。

## 6. 国民党政府との比較

話を伺い続けていると、台湾の方は、戦前の日本統治を肯定していると思いがちになる。しかしこれはあくまで戦後台湾にやってきた国民党政府があまりにひどすぎたため、日本統治時代の方がましだった、という程度であることを忘れてはいけない。台湾の方は戦前よりも今の平和な日本が好きなのだ。

## 7. 自分の在り方を見つめ、誠実に生きていきたい

蔡焜燦さんが語られた「幸せの中において幸せがみえなくなっている」の言葉がわすれられない。国連に加盟をしていない、国際的に認められた国旗も国歌もない台湾のことを思うと、日本の歴史や今の日本の平和が、どれだけ多くの犠牲の上にたっているものなのかが分かる。歴史を深く調べたり、人に会って話を聞いたりすることをつづけていくことで、繰り返し今の自分の在り方を見つめることができる。「日本人らしさ」のバトンを子どもたちに渡すことができるよう、誠実に生きていきたいと思う。